

事業会社から見た短期金融市場

2007年3月1日

三菱商事株式会社
トレジャラーオフィス
資金為替市場室

1. 事業会社を取り巻く環境変化と短期金融市場

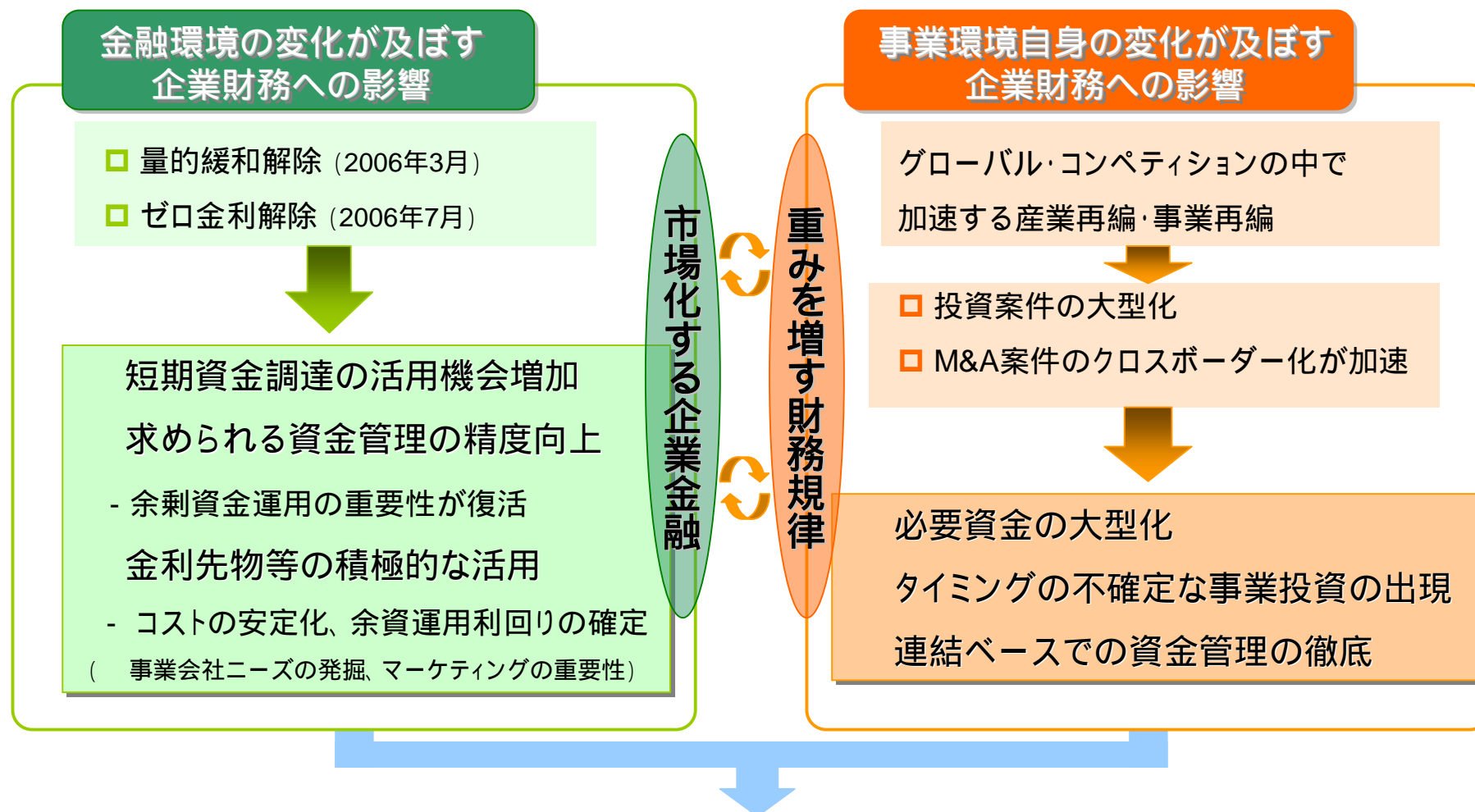
【御参考】日米CP市場規模の比較

2. 事業会社と短期金融市場

～「今、必要なもの」、「将来必要なもの」、必要な「構想力」～

【御参考】日米MMF市場規模の比較

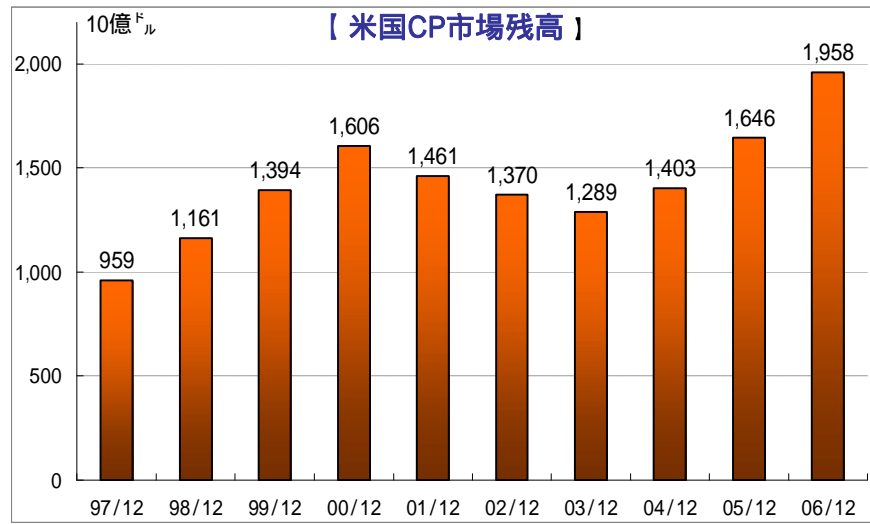
3. 終わりに



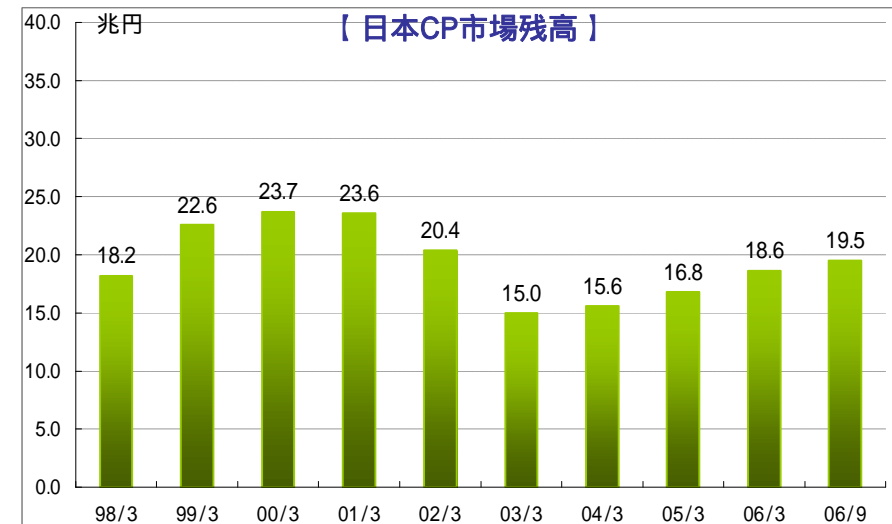
「流動性が高く、且つ、厚みのある短期金融市場の存在」が不可欠

- 調達(負債)サイド : 機動力のある資金調達
- 運用(資産)サイド : より効率的な資金管理の為の短期運用商品の拡充

【御参考】日米CP市場規模の比較

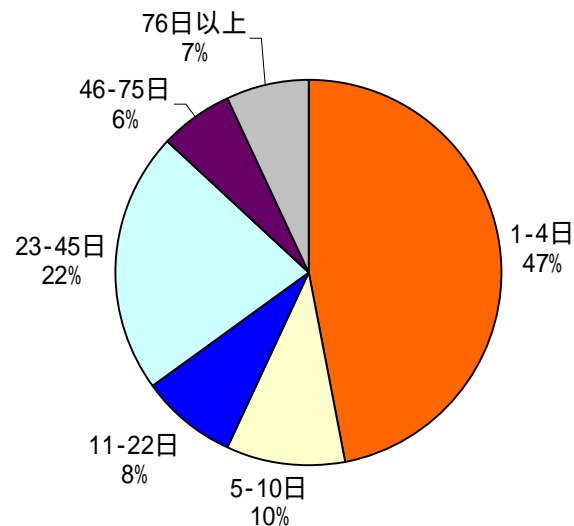


(出所 : FRB Flow of Funds)



(出所 : 金融ファクシミリ新聞)

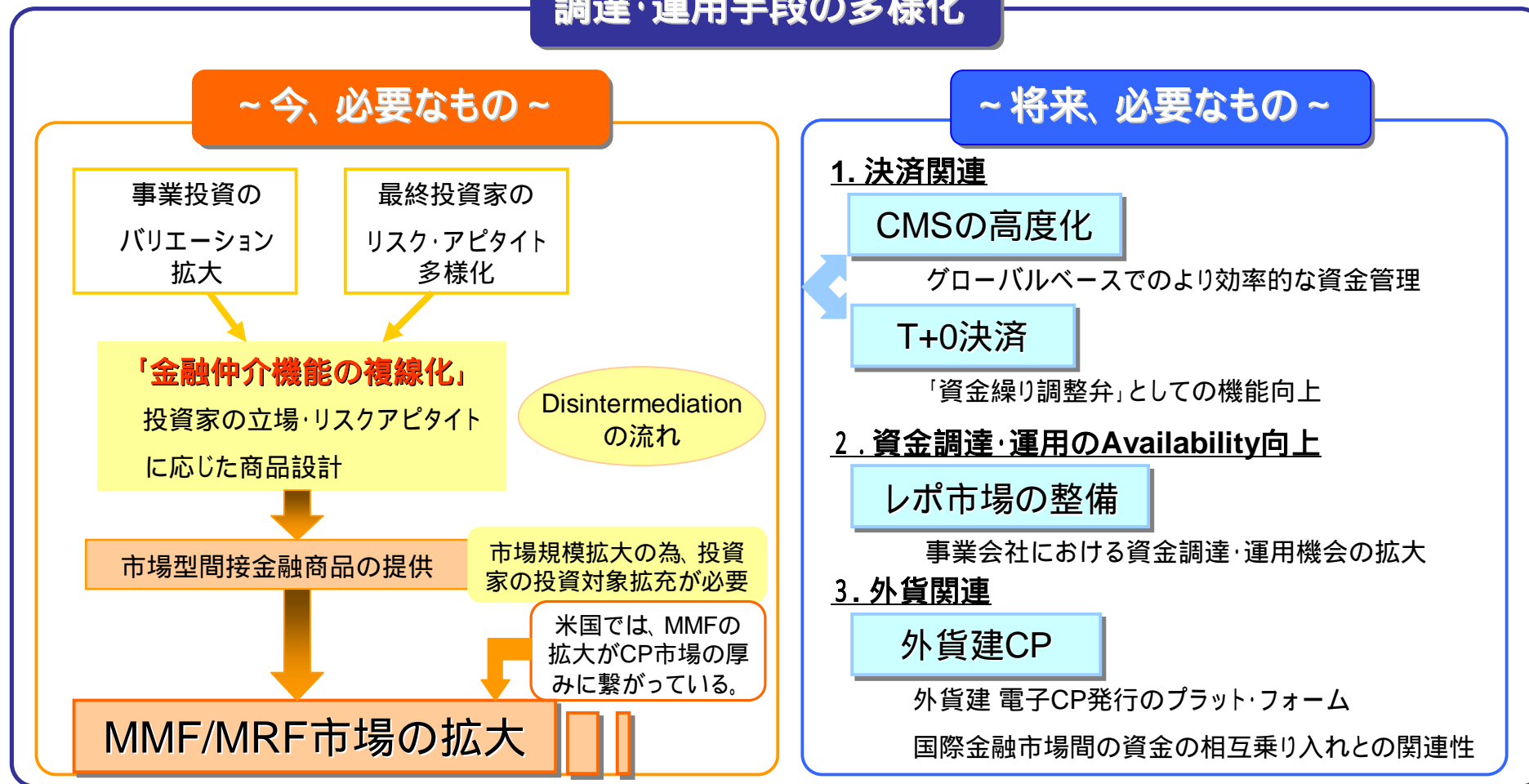
【米国CP市場に於ける発行期間(日数)】



(出所 : Merrill Lynch)

- ✓ 米国CP市場の市場規模(発行残高)は約1兆9,600億ドルと、わが国市場の約11倍の規模を有する。
- ✓ 米国CP市場に於ける平均発行期間を見ると、約5割が1～4日の超短期発行となっており、「資金繰りの調整弁」としてCPが活用されている事が判る。

調達・運用手段の多様化

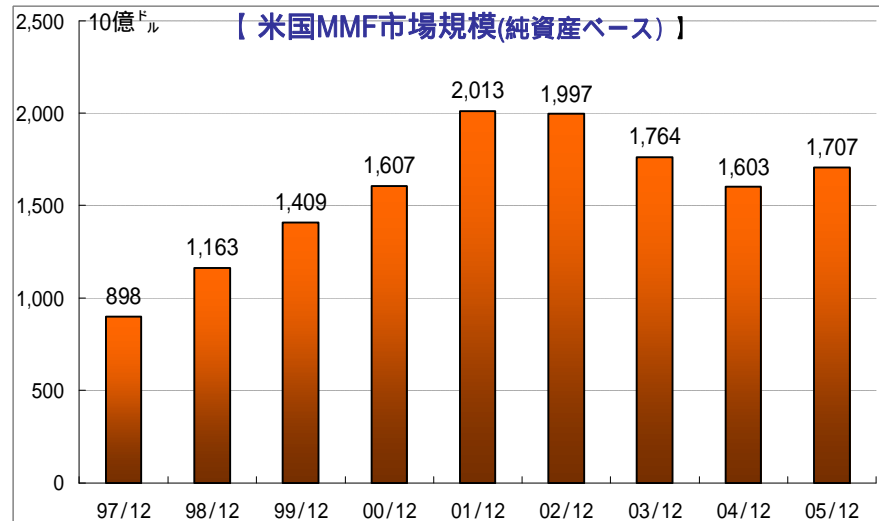


- ✓ 目指すのは「国際水準のインフラ」
- ✓ 短期金融市場のレベルをどの程度まで高めるのが課題
- ✓ 翻って、日本の金融市場をどうして行くのかが問われているのではない

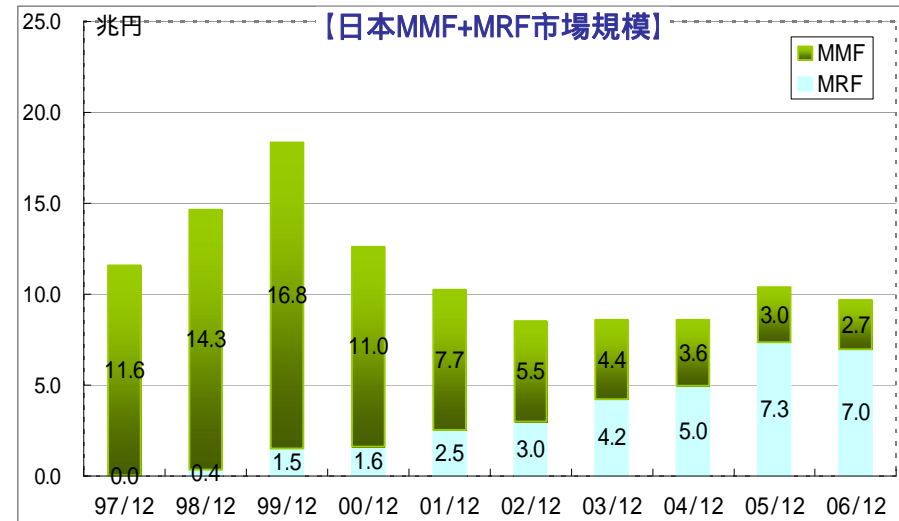
全体の
青写真

必要な
「構想力」

【御参考】日米MMF市場規模の比較



(出所: Investment Company Institute / Fact Book)



(出所: 投資信託協会)

【米国MMF市場概況】

90～95年前後の景気低迷期の金利低下局面では、市場拡大の伸びが一時低迷したものの、業界全体でMMFの安全性神話を守った事()、SECが投資ガイドラインを強化するなどの当局による規制強化等により、ファンドの安全性に対する投資家の信認が定着した事から、95年以降、市場規模は拡大基調にある。

() 89～94年にかけて、運用していたCPのデフォルトやデリバティブが組み込まれた商品への投資により、ファンドで大きな損失を計上する事態が生じたケースに於いて、運用主体が資金投入して元本割れを防止するなどの対応を行った例がある。

【日本MMF/MRF市場概況】

日本市場にMMFが登場したのは92年であり、99年頃までは順調に市場規模も拡大していたが、01年9月のマイカル経営破綻等により一部MMFが元本割れした事等が影響し、市場規模は縮小傾向にある。

一方、MMFの代替として出現したMRFは、着々と残高を拡大しつつあるものの、MMFとMRFの合計残高(06年12月末)は約9.7兆円と、ピーク時(99年12月末)の約5割に留まっている。

- わが国の短期金融市場拡大の為、MMF/MRF等の短期運用商品の更なる充実が必要不可欠である。
- わが国の事業会社がグローバルな競争の中で伍していくには、欧米企業と同様の金融インフラ・サポートが求められる。
- 事業会社は、金融市場に於いて「受身的存在」である。従い、我々事業会社は、わが国の金融市場の将来構想を深く理解し、事業活動を重ねて行く必要がある。
- 金融機関側は、金融商品の利用者や買手となる相手方の企業文化を理解する等、RMの観点から、事業会社を捉え直して行く事が重要なのではないか。
- 今、問われているのは、発信力と共に受信力を高める事。それを、対話力と言う。